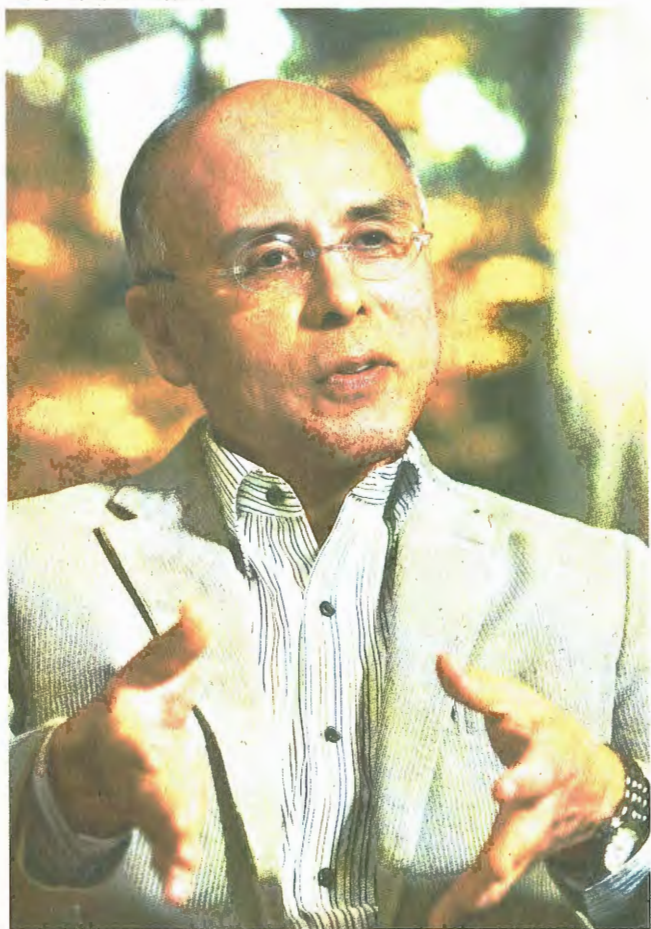


(寺河内美奈撮影)



国際基督教大教授・学務副学長

森本あんり氏

多様な評価軸を柱

持つて

世の中が一層グローバル化するの
避けられないだろう。こんな時代に活
躍できる人材の第一の条件として国語
力を挙げたい。英語力ではない。「自
分で考える力」は、思考の言語である
母語の力である。それを養うのに重要
なのは「話すこと」より「書くこと」
だ。書くことで思考が整理され、何が
分からないのが判然となり、論理的

もりもと・あんり 昭和31年、

神奈川県生まれ。国際基督教大
卒。東京神学大学院を経て、プ
リンストン神学大学院博士課程修
了。平成24年から現職。主な著作
に「反知性主義」「異端の時代」
など。

に物事を組み立てられるようになる。
上手にしゃべることも大事だが、グロ
ーバルな聴衆は語り手の話し方ではな
く、語られる内容に耳を傾けているの
だ、ということに肝に銘じてほしい。

その上で、今後の日本を担う人材に
は、複数の価値評価の「軸」を併せ持
ってほしい。グローバル化に伴い、仕
事の成果だけで人の価値を決める「能
力主義」が広がっているが、それで社
会は幸福にならない。

大学を例に挙げると、自分の論文を
書かず研究成果は上がらないが、学生
の面倒はよく見るといふ教師がいる。
研究という軸を尺度にすると低評価だ
が、教育という別の物差しで測れば貴
重な存在だし、後にその学生が優れた
研究者になれば、研究面でも社会に貢
献することになる。

多様な個性を無視し、1つの軸だけ
でものを考えると分かりやすい。だが

それは、社会の豊かさと安定を危険に
さらすことにつながる。多様性は生物
学的な知恵でもある。トウモロコシが
1つの品種になったら、1つの疫病で
全滅しかねない。個人も社会も同じだ。
打撃を受けた際、多様性があれば、被
害を最小限に抑えて再起できる。

米国の思想史で「反知性主義」を掲
げた人々もまた、世間で重視されてい
る価値観とは異なる、もう一つの価値
基準の軸を持っていた。それは「信
仰」だった。高学歴の権力者（知性主
義者）を前にしても、彼らは「神の前
では平等だ」と考えることで権力を堂
々と批判することができたのである。

もう一つの軸は、スポーツでも、芸
術でも、地域の同好者の集まりでもか
まわない。多様な尺度で世の中を見つ
めることができれば、時流の中で立ち
止まって思考できるゆとりを得られる
のである。